

園長だより NO.57

実りの秋、柔らかな陽ざしに心地よい風、果実や木の実、畑の作物や田んぼの稲も実りある秋の主演になっています。

昔から子ども達の成長も実りの秋に一段と成長していくと言われていました。心と身体の成長には自然やその気候も大きな影響を与えてくれます。心地よく過ごせる環境下で良く遊び、子ども達には育ってもらいたいと思っています。

「大人主導の保育」

保育園の生活は、あれこれと教え込む、知識や技術の習得に比重を置いていません。

私が若かりし頃、30年以上前の幼児教育には園同士が競って知識の教えこみをしていた。文字や数字のワークブック、英会話や茶道等

絵画や造形においてはそれぞれの子ども達の個性は感じられない描画や制作が多く見られた。

例えば母の日が近くなれば。「お母さんの顔」を描くわけですがそれぞれのお母さんは違って当たり前ですが指導する教諭は「目はこうなっている」「鼻はこんなふうに」「耳は？髪は？」と言う具合に黒板に手本を描き、指導していた。

大好きなお母さんだから十分に描きたい構図が湧き出せばすらすらと描くのだが・・・

描き終わった絵を見てもそれぞれの思いが反映されているものには程遠い。



2020.10.30

指導として建前は「大好きなお母さんを思いそれぞれがイメージしたものを描画にする。」本来ならそれぞれの子供達はお母さんへの思いを口々にしながら描いていることが大方、予測されるが実際はそうではない。教諭が考えることは「しっかり、上手に描けることである。」顔の輪郭や目鼻など顔の構成をとらえ肖像画チックに描かせることに主眼が置かれる。お母さんへの思いを口にしたなら「おしゃべりはしませんとお叱りを受ける」教諭は描いた絵を保育室に掲示する。

同じように描いた絵を管理職にみてもらい「上手に描けているね」「顔の構成が理解できている」と評価される。

そんな教諭が良くできる、優れた教諭とされていた。現在でもこんな風潮、文化は幼児教育界で残っている。

またこんなこともあった。母の日が近づくと決まってお母さんへの思いを子ども達へ問うこと、「好きなところ」「好きな食べ物」

「お家で何をしているのか」等々教諭の問いかけも杓子定規である決められたことを淡々と聞き、驚きもしていないのに「へー」と大げさに共感する。好きなところの質問ではひとりの子が「お洗濯しているところ」と言えば大半がその意見に流れ、また一人が「お料理しているところ」と答えれば、また大半はその意見に流れる、ある女の子が「寝ているところ」といったら「そんなこと書けるわけないでしょう」と答えを変えるよう声をかけていた。

※子ども達へ聞き取り後、その内容を表にし参観日当日に掲示していた。

「寝ているところ」が好きと答えた子どもはお母さんと一緒に寝る(眠る)ことが毎日の楽しみであった。そして時より我が子より先に寝てしまったお母さんの寝顔がこの上なく好きだと言っていた。



ここまで書いてきたことは大人主導の保育が展開されていたという事実

お母さんの顔を描くことも、それぞれに思いを聞くこともすべてが子ども達の興味や関心、そこで出てくるであろう要求を考えて計画されているものではない。楽しいとは程遠い現実であった。

保育の中での「間違った主導性」は取り除かなければならない。昨今は子ども主体、子ども中心の保育がより議論され取り上げられている。

子ども達の発達(育ち)を見通したうえでそれぞれの子ども達に寄り添い、一人一人の中に何が育っているのかを見極めていけば、子ども達にふさわしい環境や活動の内容を考えて構成できる。

毎年のこと、指導のノウハウが画一的に決められている。それも決められた時期に決められたものをこなしていかななくてはならないという慣例が「考えない 考えられない 保育者」を作っていたことに起因する。

実は私も養成校を出て数年はこんな保育をしていた。疑問に思っていたも日々追われ、精いっぱいであった。見栄え、できばえ、その成果ばかり気にしてした、同僚や先輩も同じであった。

「楽しい幼児期の経験」と口では言っていたが自分はあまり楽しいという感情をいだけなかった時期であった。

数年の後、保育内容の再考が行われ、子ども主体の保育を考え実践していくことになるが積極的に対応できる職員と古くからの体質を維持し続けようとする保育者とのさまざまな葛藤がありました。子ども達のことを第1に考え、変化しなくてはならないことを又数年かけ、それぞれの職員が意識し実践につなげていくことになっていったわけです。

保育者が子ども達の育っていくプロセス(未来)を見通して「こういう子どもに育ってほしい」という願いを持ち、(けして大人よがりな理想ではありません。)命令や管理、時には強制的等と言う大人主導の保育は取り除き、子どもたちに寄り添った働きかけをしていくことが必要と考えます。

幼児期に何を大切に保育するのだろうか保育者はどんな子どもを育てたいのだろうか保育にあたるものは保育観、子ども観をしつかりと持ち保育することが大事であると考える。

道半ば、まだまだ 頑張らねば
(園長 廣部信隆)